

戦時旅行靴

——金博士シリーズ・6——

海野十三

青空文庫

大上海だいシャンハイの地下を二百メートル下った地底ちていに、宇宙線をさけて生活している例の変り者の大科学者金博士きんはかせのことは、かねて読者もお聞き及びであろう。

かの博士が、今日までに発明した超新兵器のかずかずは、文字どおり枚挙まいぎよに遑いとまあらず、読者の知って居られるものだけでも十や二十はあるであろう。その超新兵器は、発明されて世の中に出る毎ごとに、何かしら恐ろしき騒ぎをひきおこし、気の弱い連中を毎回気絶させている次第であつた。

中でも、かの依存いぞんき梟雄ようゆうの鬻買しようかい石せき委員長は、同じ民族人なる金博士の発明兵器による被害甚大で、そのためにこれまで幾度生命いのちを落しかけたか知れず、鬻うらの金博士を恨むうらことは、居谷岩子女史おいわさんが伊右衛門いえもんどのを恨むうら比あなどに非ず、可愛さあまつて憎さが十の十幾倍という次第であつた。

「えいくそ。この上はなんとかして、わが息のあるうちに、かの金博士めの息の根を止め

てくれねば……」

というわけで、今や醬買石は、執念しゅうねんの火の玉と化かし、喰うか喰われるかの公算五十パーセントの危険をおかしても一矢をむくわで置くべきかと、あわれいじらしきことと相あ成いつた。

さて、対金方針は確定した。さらばこの上は、如何なる手段によつて、彼でか頭の金博士を抉えぐり殺してしまふべきか。

醬は、幹部を某所ぼうしよに集めて、秘密會議を開くこと連続三十九回、遂つひに會議の結論のよなものが出て来た。

その結論というのは、次の二つであつた。

金博士始末案件

(一) 王水險博士おうすいけんはかせを擁立ようりつし、金博士を牽制けんせいするとともに、必要に応じて、金博士をおびき出すこと。

(二) あらゆる好餌こうじを用意して、某国大使館の始末機關の借用方しやくようかたに成功し、その上にて該機關がいきかんを用いて金博士を始末すること。

ここに王水險博士というのは、この程、ソヴェトから帰つて来た近代に稀まれなる科学的天

才といわれる大学者で、しかも彼は、昔金博士を教えたことがあり、つまり金博士の先生だから、大博士であろうというので、王水陰博士の力を借りる計画を樹てたのである。

それからまた、某国大使館の始末機関というのは、この間新聞にも報道されたから御承知でもあろうが、要するに始末機関とは、人間を始末する機関のことであつて、普通われわれの目に日常触れる始末機関を例にとるならば、かの火葬炉の如きは、正しく始末機関の一つである。

どこをどう遺線つたか、とにかく金博士始末計画がうまく軌道にのつて動きだしたのは、その年の秋も暮れ、急に寒い北西風が巷を吹きだした頃のことである。

その頃、金博士の許へ、差出人の署名のない一通の部厚い書面が届いた。博士が封を切つて中を読んでみると、巻紙の上には情緒纏綿たる美辞が連なつて居り、切に貴郎のお出でを待つと結んで、最後に大博士王水陰上と初めて差出人の名が出て来た。

「あらなつかしや王水陰大先生！」

と、金博士は俄かに容を改めて、その風変りな書面を押し戴いたことだった。

「——ぜひ、わが任地に來れ。大きな声ではいえないが、わしも近いうちに、大使館を鹹になるのう。わしが翻譯大監として威張つとるうちに、ぜひ来て下されや」

と、王水陰博士は、大秘密を洩らして居られる。金博士にしては、かねがねその土地の風光のいいことも聞いていたので、一度はいつてみたいと思つていた。そこへ旧師からの誘いである。大先生の尊顔も久々にて拝みたいし、旁々かの土地を見物させて貰うことにしようかと、師恩に篤き金博士は大いに心を動かしたのであつた。

かくて博士は、出発の肚を決めた。いよいよ上海を出発したのが、それから一週間の後のことであつた。出発日までの一週間を、博士は出発の用意に専念した。すなわち、わざわざ大きなトランクを三つ、自製し、そのトランクの中へ、これまた博士自製のこまごましたものいろいろと詰めこんだ。まことに手数のかかった出発準備であつた。私たちが旅行するときには、デパートへいつてファイバーのトランクを一つ買い、あとはテンセンストアで、一つ十銭の歯ブラッシや雲脂取り香水や時間表や蚤取粉などを買い集めてそのトランクの中に叩きこんで出かける手軽さとは、正に天地霄壤の差があつた。

さあ、金博士の後を、われわれは紙と鉛筆とを持って追いかけることにしよう。

最初金博士は、三つのトランクを担いで飛行場へ駆けつけたが、直ちに断わられてしまった。

「まことにお気の毒ですが、こんな重い大きな荷物は、会社の飛行機には乗りませんので……」

「大きいけれど、そんなに重くはないよ」

「……それに御行先おゆきさきの方面は只今気流がたいへん悪うございましてエヤポケットがナ……それにもう一つ残念ながら御行先おゆきさきの方の定期航路は一昨日おととい以来当分のうち休航ということになりましたので……それに……」

「ああ、もうよろしい」

金博士は、サービス係の言葉を押し止め、

「何かこう、古くて役に立たない飛行機があつたら、一つ売って貰いたいものじゃが、どうじゃろう」

「古くて、役に立たない飛行機といえますと」

「つまり、翼よくが破れているとか、プロペラの端はしが欠けているとか、座席の下に穴が明いと
るとか、そういうボロ飛行機でよいのじゃ。兎とに角かく、見たところ飛行機の型をして居り、
申訳でいいから、エンジンもついて居り、プロペラの恰好をしたものがついて居ればいい
のだ」

「そういう飛行機をどうなさいますので……」

「なあに、わしが乗って、自分で飛ばすのじゃ」

「そんな飛行機が飛ぶ道理がありませんですよ」

「わしが乗れば、必ず飛ぶんだ。詳しいくわことを説明している暇はないがね、兎とに角、そう
いう飛行機を売ってくれるか売ってくれないか、一体どっちだい」

「売ってさし上げてても差さしつか支えはないのでございますが、生あいにく憎にくそんなボロ飛行機は只今
ストックになつて居りませんので……」

「無いのかい。そ、それを早くいえばいいんだ。この忙せわしいのに、だらだらとくそにもな
らん話をしてわしを引きつけて置いて……ほう、早く行かにや、大先生と約束の時間に、
〇〇へ入市できないぞ」

博士は腕はに嵌めた大きな時計を見、例の大きな三つのトランクを軽々と担ぐと、大急ぎ

で飛行場を出ていった。

後を見送ったサービス係は、ちようたいそく長大息と共にこくび小首をかしげ、

「でも力のある老人じゃなあ。あの大きいトランクを、軽々と担いでいくとは……」

金博士の姿は、こんどは埠頭ふとうに現れた。幸さいわいに八千噸トンばかりの濠洲汽船が今出帆しようとしていたところなので、博士はこれ幸いと、船員をつき突ばして、無理やりに乗船して、サロンの中へ陣取った。

「もしもし、どなたかしりませんが、もう船室がありませんので」

事務長がこわい顔をして博士のところへやって来た。

「船室？ 船室はあるじゃないか。このとおり広い部屋があいているじゃないか」

「これはサロンでございまして、船室ではありません。御覧の通り、おやすみになるとい
たしましても、ベッドもありませんような次第です」

「いや、このソファの上に寝るから、心配しなさんな」

「それは困ります。では何とか船室を整理いたしまして、ベッドのある部屋を一つ作るで
ございましょう」

「何とでも勝手にしたまえ。わしは汽船に乗ったという名目めいもくさえつけばええのじゃ」

「え、名目と申しますと……」

「それは、こつちの話だ。ときにこの汽船は何時に〇〇港へ入る予定になつとるかね」

「はい、〇〇港入港は明後日みょうごにちの夕刻ゆうこくでございます」

「何じや明後日の夕刻？ ずいぶん遅いじやないか。わしは、そんなに待つとられん」

「待つとられないと仰おつしや有つても、今更予定の時間をどうすることも出来ません」

「ああもうよろしい。わしは明朝みょうちようには〇〇港着と決めたから、もう何もいわんでよろ

し」

「はあ、さいですか」

金博士のことを、船内では気が変でないと思わない者は、ひとりもなかった。

3

金博士のために、第二二二号の船室が明あけられた。

「これは至極しじく覚えやすい船室番号じやわい」

博士は、又ぞろ三つのトランクをひっさげてその部屋に移った。ボーイが、そのトランクを持つとしたら、博士は奇声きせいを発して叱りつけたことだった。

間もなく夜となった。

そのうちに、船首でえらい騒ぎが起った。舳へさきで切り分ける波浪はろうが、たいへん高くのぼって、甲板かんばんの船具を海へ持つていつて仕様がないうのであつた。そのうちに水夫が三名、船員が一名、その高い浪にさらわれて行方不明となった。

舳で切り分ける波浪があまり高くて、そのために船員や船具がさらわれたと報告しても、知らないものは信用しなかつた。

「なにしろ波浪はばしちが、檣ぼしちの上まで高くあがるんだぜ」

「冗談じゆんたんいうない。どんな嵐のときだつて、舳から甲板の上へざーっと上つてくるくらいだ。檣の上まで波浪が上るなどと、そんな馬鹿氣たことがあつてたまるかい」

「いや、その馬鹿氣たことが現げんに起つているんだから、全く馬鹿氣た話さ」

そんな騒ぎのうちに、船橋フリッジでも秘ひそかなる大騒ぎが起つていた。

「どうも不思議だ。機関部は十五ノットの速力を出しているというが、実測じつそくするところ

汽船は四十五ノツトも出ているんだ」

「そうだ。たしかにそれくらいは出ているかもしれない。機関部の計器が狂っているのじゃないか」

「どうもあまり不思議だから、今機関部に命じてノツトを零ゼロに下げさせているんだがね」
そのうちに機関部からは、機関の運転を中止したと報告があった。

「なに、機関の運転を中止したって、冗談じゃない。今現に実測じっそくによると本船は四十ノツトの快速力で走っているじゃないか」

「惰力だりよくで走っているのじゃないですか」

「そうかしらん」

といっているうちに、実測速力計の針は、またまたぐいっと右へ跳はねて、速力四十八ノツトと殖ふえて来た。

「いやだね。エンジンが停つて、速力が殖えるなんて、どうしたことだ。おれはもう運転士の免状を引き破ることに決めた」

「いや、俺は気が変になつたらしい」

「わしは、もう船長を辞職だ」

わいわいいつているうちに、とつぜん大きな音響と共に、船体はひどい衝動をうけ、ぐらぐらと大揺れに揺れたかと思うと、今度はぱったり動かなくなつた。

さあたいへん。頭が変だと思つていた船員たちは、周章あわてて跳ね起きると甲板へとびだした。

すると、何というべら棒な話であろう。汽船の前には、美しい花壇かだんがあつた。又汽船の後には道路があつて、自動車がつくりかえていた。右舷うげんを見れば、町であつた。左舷さげんを見ればこれも町であつた。これは変だ。やーい、海はどこへいった。

船員たちは、一同揃いも揃つてダブルで気が変になりそうであつたが、中に気の強い者もいて、本船の位置について鮮あざやかなる判定を下した。

「おい、何といつても、これは、わが汽船は〇〇港の陸上へのしあげたのだよ。ここは〇〇市だ」

「そんなべら棒な話があるかい。〇〇港なら、まだ二日のちじやないと入港できないんだ」
 「馬鹿をいえ。お前たちの目にも、ここが〇〇市だつてえことが分るはずだ。ほら向うを見ろ。幾度もいつてお馴染なじみの木馬館もくばかんの塔たかがあそこに見えるじやないか」

「ははん、こいつは不思議だ。あれはたしかに木馬館だ。するとやっぱり本当かな、わが

汽船が〇〇市に乗りあげたというのは」

そんなことをいつているところへ、船室から金博士が現れた。例の三つのトランクを軽々と担いで、舷ふなべりを越えて、花園へ下りようとすするから、船員がおどろいて博士の傍そばへ飛んでいった。

「そんなところから降りてはいけません。第一、まだ税関ぜいかんがやってこないのです。トランクの中を調べないと、上陸は不可能です」

「厄やっかい介なことを云うねえ。じゃ、今開けるから、お前ちよいと見て置いて、後で税関へ見せるようどこかへ書いておいて貰おう。さあ見てくれ」

そういつて金博士は、まるで箱師がトランクを開くような鮮あざやかな速さで三つのトランクをぽんぽんぽんと開いてみせた。

「さあ見てくれ」

云い出したからには、事務長、勢おもむいよく赴くところ、何とも仕方がなく、開かれたトランクの内容ないよう如何いかんと覗のぞきこんだ。が、途端に怪訝けげんな面持で、

「もしお客さん。これは税金が相当懸かかりますぞ。いいですか」

「税金なぞかかる筈はない。全部身のまわりの品物だ」

「そうともいえませんね。だって、身のまわり品である筈の洋服もシャツも歯ブラシも見当りませんですぞ。詰め込んであるのは、ラジオの器械のようなものに、ペンチに針金はりかねに電池に、それから真空管しんくうかんにジヤイロスコープに、それからその不思議なモートルにクランク・シャフトに発条はつじょうにリベットに高声器こうせいきに……」

「いくら数えてもきりがないから、もうよしたらどうじゃ。要するに右に述べたものは全部わしの身のまわり品だから、誤解して貰つては困る」

「尤ももつと、新品はないから、商品じゃないということは分ります。ではよろしゅうございませぬ。品名だけはノートして置きますが、まず此場このばは税金を懸けないで、お通り願うということにいたしましょう」

「ほう、漸ようやく話がわかつてきたね」

博士は、その場に引き散らかされた道具を一生けんめい掻き集め、トランクの中に入れて、蓋ふたをした。そして軽々と肩に担いだのであった。

「ちよつと待つてください。何だか空からのトランクを担いでいられるように見えますね。どれ、ちよつと持たせてみてください」

事務長がそのトランクをさげってみると、なるほど空のトランクのように軽い。

「はて、面妖めんような。あれだけ重い道具を入れて、こんなに軽いとは、まるで手品みたいだ。お客さん、あなたは早いところ、あの道具類をトランクから抜いて、どこかへ隠してしましましたね」

「冗談いつちや困るよ。あの身のまわり品はちゃんと中に入っているよ。ほら、このとおり……」

金博士は、わざわざ三つのトランクを、もう一度開いて事務長たちに見せてやった。道具類は、ちゃんとぎっしり詰まっていた。

「おかしいな」

事務長は、その中うちから、小型のモートルを選んで、取り出した。

「おや、このモートルの重さだけでも、トランクより重いくらいだ。すると、或る重いAなる物品を入れたトランクBの総重量AプラスBプラスアルファは、元のAよりも軽い——というの、どういう算術になるのかしらん。どうも式が成立たんように思うが」

「おい事務長さん。お前さんは中学校で算術の点が優ゆうか秀しゅうだったらしいね」と博士はいつて、

「だが、わしのトランクに関するかぎり、そのような純じゆん真しんな算術は成り立たないのだ

よ。忙しいから説明をしてられないが、しかしこれは事実なんだ。つまり、AはAプラスBプラスアルファよりも大なりという場合が有り得るんだ。この解法がお前さんに分つたら、お前さんに人造モルモットを一匹、褒美ほうびにあげてもいいよ」

「へえ、そうですかね。しかし私には、とても分りません。なんとか今、説明していつてください」

「そうかね、聞きたいかね。それじゃちよつと説明しようかね」

先を急ぐ筈の金博士は、そこで急にのんびり腰を据すえてしまつて、

「いいかね。ここにABCDEなる五つの部分品があつたとする。いずれも、重さは十キロずつとして、合計五十キロの重さのものだつたとする」

「はい、その算術は分ります」

「ところが、そのABCDEの部分品を一処にして測はかると、総重量がたった二十キロしかないんだ」

「そこがどうも分りませんなあ。一つ十キロのものが五個あれば、どんな場合でも総量は五十キロです」

「ところが、それが何とかの浅ましきというやつなんだ。いいかね。ABCDEの部分品

をばらばらにして置いて一々測ると総計五十キロある。これはよろしい。その部分品を組み合わせると、これがなんと二十キロになる——という場合は、只一つある。それは、その部分品で組立てた器械が、じゅうりよくだしょうき重力打消器であつた場合だ」

「え、重力打消器というところ……」

「つまり、みなもと重さの源である重力を打消す器械のことを、重力打消器というのだ。つまり五十キロの部分品から成るその重力打消器は、組立てられることによつて、三十キロの重力を打消す性能のものだつたんだ。だから五十キロ引く三十キロで、残りは二十キロと出る。どうだこの算術は間違いなしによく分るだろう」

「うへーッ、こいつはおどろ愕きましたな」

と、事務長は目を丸くして、

「それで何ですか、貴下のお持ちになつて三つのトランクの内容物は、いずれも重力打消器の全部分品なんですか。で、何でも重力打消器を三つも、ぶら下げて歩かれるのですか」

「せつかく折角だが、お前さんの想像力は、すこしばかり弱いよ。わしのトランクの中に入つてゐる身のまわり品は、必要とあれば重力打消器を組立てることも出来るし、また必要とあ

らば、ラジオ送受信機そうじゆしんきとしても組立てられるし、又或る場合には兵器——いやナムニヤムニヤムニヤムニヤ——で、つまりその又或る場合には、唧筒ポンプみたいなものにも組立てられるのだ。どうだ、魂消たまげたか」

「へー、さいですか。こいつはいよいよ愕きましたな。そしてお話を伺うかがっていると、そのトランクがだんだん欲しくなってきましたが、いかがですか、その一つを私にお分け下さるわけには……」

4

「いや、それはまたこの次のことにしましょう。わしは今度は急用でこの〇〇港にやってきたのでな。商談は、またこの次の機会ということに願います」

そういつて、博士は、重力打消器が入っているトランクを軽々と肩にのせて、歩きだした。すると、何思い出したか、事務長がまた追いかけて来て、

「もし、お客さんへ。もう一つ、伺うかがいたいことがあるのです。ちよつとお待ちを……」

「ええい、よく停める男だね。もういい加減かげんに放してください」

「私のもう一つ伺いたいことは、この汽船が、機関部とは無関係なすばらしい快速を出して〇〇市に乗り上げてしまいましたが、あの快速ふりは、お客さんがそこにお持ちのトランクの内容品と、何か関連があるのですかな」

「ああ、そのことか」

博士は、そこに立ち停つて、

「それは大いに関係ありじや。わしが乗らなきや、ああは快速が出るものか。あれはつまり、わしが船室内で、このトランクの中に入っている部分品を組合わせて、一つの強きょうり力りき動力装置よくどくりよくそうちを作つたんじや。そしてそれを動かしたもんだから、それであのように、二日半もかかるところを一日で来たんじや」

「へえ、やつぱり、さいでしたか」

「実は、わしのあの器械を使えば、汽船もいらなしいし、飛行機もなくて、ちやんと快速旅行が出来るのだ。しかしそれをやると、世間の眼についていかんのじや。じやによつて、わしは何か尤もつともらしくした乗物に乗ることになっている。それに乗った上で、わしはわしの

都合により、あの強力動力装置を組立ててそれを動かし、ちよつと一ひねりやっても、あのような汽船としては快速の部に入る速力を出せるのじゃ。どうじゃ、もうその辺でよろしかろう」

金博士は、庶民階級がすきだと見えて、いつになく短気を出さず、淳々として丘へあがった船上で、通俗講演をいくさりぶつたのであった。

「ああそうそう。某国大使館というのは、どこですかねえ」

こんどは金博士の方が声をかけた。

「某国大使館なら、ほら、向うの山の麓に、塔の上にきれいな旗がひらひらしている城のような建物がありましたよ。あれが某国大使館です。しかしお客さん？ あなた、あそこへお出でになるのですしたら、おやめになるようおすすめします」

「そりゃ何故かね」

「何故って、あの大使館は当時評判がよろしくないんで……。過去一年間に、あの大使館をくぐった者は、総計七千七百七十七人です。ところがあの門を出て来たものがたった四千四百四十四人なんです。不思議じゃありませんか」

「別に不思議とは思われんがのう。算術をすると、すぐ答が出るじゃないか。七千七百七

十七人マイナス四千四百四十四人イコール三千三百三十三人と御明算ごめいさんが出る。すなわちこの人数たるや、某国大使館内に現に寝泊りしている館員の数である。どうじゃ、簡単な算術ではないか」

「いえ、そうじゃないんで……。あの大使館員は、実数わずかに三百三十二名なんですぞ」
「たつた三百三十二名」

「そうです。すなわち、もう一度引き算をいたしましたして、三千三百三十三名から引くの三百三十二名は三千一名と答が出来まして、この三千一名なる人間が、奇怪にもあの某国大使館に入ったきり、出ても参らず、館内に生活もして居らずという無理数的存在むりすうてきなんです。ですからお客さんも、その無理数の中にお加わりになりませんようにと御注意申し上げます。ような次第で、へい」

「いや、よく分りましたわい。しかしわが金博士に限って、心配は無用でござる。では、さらばさらば」

と、金博士は事務長に挨拶すると、舷ふなべりをまたいで、傾斜した船側せんそくの上を滑り台すべだいのように滑って、どきりと百花咲き乱れる花壇の真中に、トランク諸共もろとも尻餅しりもちをついたのであった。

なにがさて、気の短い金博士のことであるから、身の危険も、相手方の思惑も考えないで、その足でつかつかと某国大使館の玄関から押し入ったものである。

「大先生は居られぬか。王水陰大先生のお部屋はどこであるか。只今金博士が推参いたしましたぞ」

とうとう王水陰大先生が朝寝坊の居間が、金博士自らの搜索によって発見せられた。「やややや、お前は金か。お前の来るのは、まだ二三日先だと思つて油断をしていたが、やややや、もう来たか」

王大先生は、喜ぶより前に、愕き且つ呆れてしまった。

「大先生、おなつかしゆうございますな。ところで、この某国大使館では近々先生の鹹るという話を御書面で承知しましたが、けしからんですなあ。私がこれから某国大使に会

「いまして、それを思い停らせましょう」

「いやなに、それには及ばないよ。どうせ仕方がないのだから」

「仕方ないなどと、今の積極時代せつぎよくじだいに引込んで居ひきこられることはありません。私が大使に強談判こわだんぱんをして……」

「いや、そんなことをしても無駄じや。わしが鹹くびになるだけではなく、大使自身も鹹くびになるのだ。大使ばかりではない。参事官さんじかんも書記生しよきせいも語学将校えんていもコックも、みんな鹹くびになるのじや」

「はて、それは一体どういうわけ……」

「早くいえば、この大使館の本国が亡びるのじや。ドイツ軍は、もう間近まぢかに迫っている。

だからこの某国大使館も解散ほかの外ほかないのである」

「はあ、そんなことでしたか。しかしこれだけ立派な建物を空あき家やにするのは惜しい。大先生、私この建物を買ってもいいですよ。全く惜まつたしいものだ」

と、金博士はあたりをきよろきよると見廻す。そのときベッドの下から大先生の袖を引く者があった。

「おッ」

その怪しげなる袖引き人間は、外でもなく油断をしてここにベッドを並べて止宿ししゆくちゆう中の醬しょうかいせき買石委員長であったのである。

「……金博士に見つかればたいへんです。私を窓から逃がして下さい」

醬は泣き声になって、王大先生に囁ささやく。

「よろしい、わしの手を見て、早いところをやれ」

と大先生はベッドの下と連絡をとつて、やおら金博士の方へ向き、

「天てんじょう井のあそこにある彫刻な、あれは中々古いもので、純じゆんきん金だよ。よつく御覽！」

「へえ、あれがね」

金博士を向く、王大先生はお尻のところはで手を振る。とたんに硝子窓ガラスまどが大きな音をたてて跳ねかえつた。

「あ、あれは何の音？」

金博士の顔が、さつと緊張した。

「あははは、今のは猫がとび出したのじゃ」

「あれで猫ですか。へえ、おどろきましたな。〇〇の猫は、ずいぶん大きくて人間ぐらいの大きさがあると見えますなあ」

金博士は、大真面目でいった。

窓からとびだした醬は、そのとき運悪く柅ひいらぎの木の枝にひっかかり、顔も手足も血だらけにして歯をくいしばっていたが、金博士の声を耳にしてびっくり仰ぎょうてん天、狼狽ろうばいする途と端たんに、すとんと地面へ落ちて、いやというほど腰をうちつけた。それでも彼は助かりたい一心で、臘肭獸おつとせいの如く両手で匍はつて、そこを逃げだした。

「とにかく金よ、お前も長途ちやうとの旅行で疲れたろう。この寢室を貸してあげるから、ゆつくりひと寝入りしなさい。その間に、われわれは万端ばんたんの用意を整ととのえることにするから」

「はあ、大先生、お構い下さいますな。どうぞ大袈裟おおげさな用意などなさらぬように……」

「まあいい、この部屋は静かだから、よく睡れるだろう。では、おやすみ。夕刻ゆうこくになつたら起してやろう」

「はあ、恐おそれ入ります」

王水險先生は、自室を金博士に譲つて、そこを出ていった。そして戸口を出るとき、そつと外から鍵をかけることを忘れなかった。こうして金博士を缶詰にして置いて、遅まきながら万端の用意にかかれれば夕方までにはこの大使館の始末機関はすぐ使えるようになるだろう。

そんなことを考えながら廊下を歩いていると、後から呼ぶ者があつた。それは余人よじんではなく、松葉杖まつばづえをついた醬だつた。

「おや、お前、足をやられたか」

「はあ、柀の樹から落ちたものですから。ところで大先生、あいつは何をしていますか」

「ああ金のことか。金は今わたしたちの部屋で旅の疲れを癒いすため、一寝入りひとねいさせているよ。実は早いところ空气中に睡眠薬をまいて置いたから、金のやつはもう二十分のちには両の瞼まぶたかくつついて、それからあと正味しょうみ六時間は、死んだようになってぐうぐう睡ることだろう」

「ああそうですか。それは手間てまが省けていい。じゃあこの大使館の始末を借りるまでもなく、余よ自みづからが彼の寢室に忍びこみ、余よ自みづからの青竜せいりゆう刀を以て、余よ自みづからが彼の首をはねてしまいましよう」

「そうするか。わしのためには、可愛い弟子だったが、悪に魅みられた今となつては、泪なみだをふるつて首を斬ることにするか。おもう四十分経つた。金のやつ、ぐつすり寝こんでいる頃じゃ」

醬にうまくいくるめられている王水險大先生は、最高の善事ぜんじをするつもりで、醬を引ひ

具し、窓下に高梯子をかけ、それをよじ登って、窓からそと金博士の様子を窺ったのである。

ところが、寝台は空であつた。もう一つの寝台も空であつた。

「おや、金のやつ、さては逃げたな」

とうとう取逃がしたかと、残念そうに両人が室内を睨んでいると、ふと目についた物がある。それは一台の小型タンクであつた。

「ありや、あんなどころに、変なものがあるぞ」

「小型タンクなど、誰が持つて来たのでしょうか」

両人は、不思議に思つて、窓から忍びこむと、部屋の真中に置かれてあるタンクに近づいた。

そのタンクは、扉を開こうとしても開かなかつた。ただタンクの上に貼紙があつた。「午後四時までこの中にて熟睡する故、何者もわが熟睡を妨ぐるなかれ。金博士」と書いてあつた。金博士は、このタンクの中に睡っているのか。そういえばなるほど、どこからか、大きな鼾が聞えてくる。

醬と王水陰大先生とは、さすがにタンクには手が出しかねて、さすが退却のほかなか

った。だが御兩人とも、まさかこの小型タンクが例の金博士の三個のトランクによつて構築されたものだとは気がつくまい。金博士の鼾の音は、このとき一段と高くなつた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1941（昭和16）年10月号

※「四谷怪談」における「伊右衛門」の妻は、「民谷岩」とされます。「居谷岩子女史
《おいわさん》」と「民谷岩」の関係に疑問が残ったので、当該箇所にもママ注記を付しま
した。

入力：tatsuki

校正：まや

2005年5月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ
ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

戦時旅行靴

——金博士シリーズ・6——

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>